

発行・一般社団法人幸樹会「幸樹」編集委員会
.....幸樹会事業所.....

からたち薬局・介護ショップからたち ☎047-710-2785
あんず訪問看護ステーション ☎047-701-5559
あんず居宅介護事業所 ☎047-701-5558
ケアステーションゆず ☎047-701-5506
看護小規模多機能型居宅介護さんしょう ☎047-710-0331
〒270-2254 千葉県松戸市河原塚 411-1 幸樹会館



「花の杭に居場所をとられてカエルの冷や汗」 絵・井上 忠司

愛知県生れ。文化学院デザイン科卒業後、グラフィックデザインの世界へ。食品関係・洗剤関係の仕事を経てパッケージのアートディレクター（AD）になる。リタイア後に趣味で始めたバードウォッチングにはまり、10年間鳥の絵を描いてきました。さんしょうのご利用者です。



屋上花壇・菜園
活躍しています

温かくなって、利用者の皆さんと職員手作りの幸樹会館屋上の花壇・菜園が活躍しています。いろいろな花々が咲き乱れ、野菜やハーブもとれて給食などに供されています。

（▶右は、菜園で採れたラディッシュを描いた武井和世さんの絵手紙です）



ハーブの香り、楽しんで

第8回地域交流カフェ

4月18日、「アロマテラピーを楽しみましょう」をテーマに、第8回地域交流カフェが行われました。



準備は、前日夕方からワイワイと始まりました。あれこれ作り始める時間もなかなか楽しいもの。クッキーを焼く甘い匂いがフロア中をただよいました。集めたダンボールにビニールを貼って、模造紙やお花紙を使い足湯の準備。当日は、会場設定をし、籠にビニール袋を張り、水を入れて、屋上のレタスやハーブを活けます。今度はハーブの香りがフロア中ただよいます。祭りの前の活気ある感じとでもいいでしょうか…。職員の気分も盛り上がってきます。当日は参加できない職員も、何かの形で関わっています。



ハーブを使った料理は、チキンのトマト煮（職員自宅庭のローリエ・屋上のタイム）、サフランライス、クラムチャウダー、卵サンド（屋上のラディッシュ・サラダ菜）。利用者さんのお家からいただいたり、職員が持ってきたローズマリー・レモンバームを入れて、クッキー・ミント入りココアクッキーも手作りました。

「おいしい!」「楽しい!」と、お昼ご飯を食べながらおしゃべりして、お腹がいっぱいになってきたら…。今度は足浴や手浴を。大塚かすみ看護師が足浴や手浴の効果をお話します。血行が良くなる・リラックス

するなど、よい効果が得られますので試していただくことにしました。アロマの香りはお好きなものを選んでいただいて、看護師による足や手のマッサージを受けた方もいます。「足湯大好きなんです。ずっと入っていたいわ」「足だけなのに体中ぼかぼかしてきた!」「なんだかお姫様になった気分～」など大好評。



リラックスしたところで、ハーブティが入りました。今回は介護職の加藤義幸さんが（栄養士でもあります）ルイボスティやマンゴーティなど、優しいフレーバーを選んできてくれました。ハーブ入りクッキーとの相性も抜群です。

恒例のハンドベルは「桜坂」、手話コーラスは「世界にひとつだけの花」でした。

「一人暮らしで、誰とも話さない日があるの。おしゃべりしただけでも楽しかったわ。また来ますね」と言ってくださった方も。介護保険の認定を受けていないと幸樹会とは縁がないと思っている方もいらっしゃると思いますが、おしゃべりしに来て下さるボランティアも随時募集していますので、いつでも遊びに来てください。



ピアノの名手、浅尾
いずみ・ゆず副所長



手話リーダー、奥村万里子・
あんず訪問看護師長

次回第9回地域交流カフェは6月20日です

♪ フルートの調べ、流れて ♪

4月22日(土)、三和病院渡邊英二郎医師によるフルートの演奏会がありました。看多機「さんしょう」の利用者さんが12年前に渡邊先生に診察をしてもらった時から、二人とも音楽好きという共通点があり気が合う関係だったとのこと。渡邊先生が前日にお見舞いに来てくれて、「先生の演奏聴きたいなあ」というところから話が始まり「急だけど、明日演奏会するよ」と、とんとん拍子に話が決まりました。

当日は利用者さんとそのご家族や、現在の主治医の三和病院の高林克比己先生・渡邊聡枝先生と病院職員の皆さん、幸樹会職員で、演奏を楽しみました。



クラシックを中心に選曲され、ゆったりとした気分になりました。その利用者さんが童謡の合唱をなさっていたこともあり、途中「とおりゃんせ」をはさみ、皆で口ずさむ場面もありました。生で聞く楽器の音は本当にきれいで素敵で、昔からのお付き合いのドクターが演奏して下さるといっても幸せですね。

渡邊先生は「また、いつでも来るからね」と気さくに言ってくださいました。

新入職員の紹介です

看護師・

南雲朋子さん

私の父は昨年、救急車でかかり付けの病院に運ばれ、1週間程度の入院予定と説明を受けましたが…、5日目に亡くなりました。入院して、「1週間程度で退院」と説明を受けた時点で嫌な予感がしました。直ぐに家族会議。「自宅に連れて帰りたい」と申し出ました。しかし、主治医から許可をもらうことは出来ませんでした。入院2日目には、「いつ亡くなってもおかしくない状態」と説明が変わりました。「自宅で看取りたい」との再びの申し出も、許可はもらえませんでした。

そんな時に、前の職場で一緒だった中野さんに相談をしました。直ぐに色々対策を講じて下さり、三和病院に連絡が取れるように手配して頂き、転院→退院

→訪問で自宅看取りも可能だと段取りを決めて頂きました。しかし、父は、転院する数時間前に息を引き取りました。

悔やまれる事がたくさんあって、私は自分を責めました。でもあの時、中野さんに相談しなければ父に「家に帰れるから、もう少し頑張って」と言えませんでした。家族も希望を持てなかったはず。幸樹会の職員の皆さんも協力して直ぐに受け入れの準備をしていてくれたのだと思います。

父については、家族それぞれ後悔はありますが、80歳で初めての入院、短い期間で苦しまずに大好きな母に看取られたので良かったと考えられるようになりました。父は、直接的にはお世話になれませんでした。私が幸樹会で働かせて頂く事になり、しみじみ“縁”を感じています。在宅医療・訪問看護、介護については初心者ですが、私のように後悔する人が少しでも救われるようにお手伝いが出来たら嬉しいです。

また、私には2歳の息子がいて、今話題の待機児童です。保育園に入園できるまでの間の予定で、幸樹会のご厚意で一緒に出勤させて頂いています。息子は、中野さんはじめ職員の皆さんだけでなく、利用者の皆さんにも可愛がって頂き、とても楽しんでいるようです。息子共々、どうぞ宜しくお願い致します。



息子の太輔君と

◀介護職員・原 広和さん

私が介護職に興味を持ったのは、祖母の1人暮らしが難しくなり、実家と同じマンションに越してきたことからでした。初めに勤めたのはグループホームでした。そこでは、主に料理や盛り付け、掃除など日常のことを一緒に楽しく出来る様に生活自立支援をしました。結婚を機に松戸市に越してきてからは、理学療法士や作業療法士に指示を受け体操をメインにする施設に従事してきました。まだまだ知らないことは多く、苦手な事も本当に沢山あります。不勉強ではありますが、いままで経験したことを活かせるように頑張っていきたいと思っております。宜しくお願いします。

介護職員・郡司智博さん▶

利用者の方々と共に笑顔で過ごせる様、日々取り組んでいきたいと思っておりますので、これからよろしくお祈り致します。



八柱学習会（定期勉強会）

●前回報告 4月21日（金）。助言者 武井幸穂氏
テーマ：看取りケア③

エリザベス・キューブラー・ロス

「死の瞬間—

死とその過程について」から

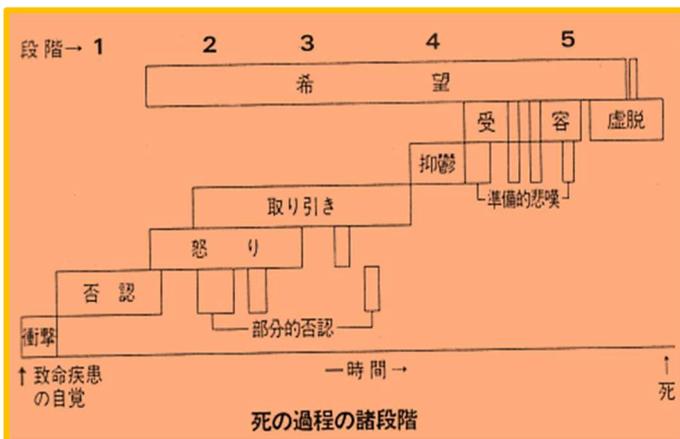
【概要と参加者感想】参加者 17名。

キューブラー・ロス『死の瞬間—死とその過程について』（中公文庫）は、医療従事者の必読文献とされていますが、介護従事者はもちろん、一般の人々にとっても学ぶことが多いと思われる本なので、とりあげてみました。

1965年当時、シカゴ大学リビングス病院の精神科医師であったキューブラー・ロスは、神学生・医学生のために学際セミナー「死とその過程」を始めます。死期が近づいた患者たちにセミナー教室に来てもらい、学生たちが見ている前で患者インタビューをしました。学生の教育として死に向かっている患者の心を学ばせなければいけないと考えたのです。

「死体を漁るハゲタカ」などと、医師たちからは猛反発されましたが、セミナーは次第に大評判となり次々と患者を呼び、参加者・賛同者を増やし、2年後には医学部・神学部の正式科目になります。

死に向かっていると知っている患者に本当はどういう気持ちなのか語ってもらうといっても、ひとり一人の気持ちは全く違います。病状が違う、家庭的・社会的状況も違う、価値観なども違う。だから、自らの死についての心情は、それぞれ全く違うのですが、インタビューなどを通して、200人くらいの人々の死に立ち会ったキューブラー・ロスは、死に向かう過程を、衝撃・否認、怒り、取り引き、抑鬱、受容（虚脱）の五段階にまとめました（図）。



不治の病を告げられた患者は、ショックを受け「まさかそんなことに自分が」と否認します。その後には怒りや憤りがさまざまな形をとって現われます。それ

今日の屋上太陽光発電量は…
1,254 kWh
幸樹会館電力使用量 4472kwh 自給率 28.0%

から何とか死を逃れる方法はないか、死期を延ばせることができなかいなどの取り引きの段階に進み、それが不可能となると抑鬱の段階に移行します。やがて、覚悟がきまれば最終的な受容の段階に到達します。この段階は、必ず順を追って現れるが、ときには重なることもあります。そして、どの段階にあるかにかかわらず、患者たちはみな最後まで何らかの希望を持ち続けた、とキューブラー・ロスは指摘しています。

「私の願いは、この本を読んだ人が、“望みのない”病人から尻込みすることなく、彼らに近づき、彼らが人生の最後の時間を過ごす手伝いができるようになることである。そうしたことができるようになれば、その経験が病人だけでなく、自分にとっても有益になりうるということがわかるだろうし、人間の心の働きについて多くを学ぶことができ、自分たちの存在のどこがいちばん人間らしい側面であることがわかるだろう。そしてこの経験によって心はより豊かになり、おそらくは自分の死に対する不安も少なくなるのではなかろうか」というのが、この本を書いたキューブラー・ロスのメッセージです。

30年前にこの本に出合っていたら…

『死とその過程について』は1969年に出版されると大ベストセラーになり（日本語訳出版は1971年）、今でも広く読みつがれています。彼女はその後、私財を投じて死に向かう患者のための施設を開設、ホスピス運動や緩和ケアにも大きな影響を与えました。

参加者からは、「30年ほど前に母をがんで亡くしましたが、本人への告知はまだ一般的ではなく、医師から話してもらえない母は、自分のがんではないかと私に問いました。私は答えることができず、その後の母は、誰も本当のことは言ってくれないと、沈んだ気持ちのまま亡くなりました。その当時、こういう本や考えを知っていたらと、残念です…」などの感想や、がんなどの病気で肉親を看取った方々から、その経験談がありました。

●次回学習会予定（定例日：毎月第3金曜日）

日時：5月19日（金）18：30～19：30

テーマ：看取りケア④

上野千鶴子『おひとりさまの最後』から

*場所：幸樹会館2階 *参加自由

看護師・介護職・ケアマネ・薬剤師募集中！
連絡先☎047-701-7550 幸樹会本部・中野まで

★ホームページ、ブログもあります★